

多くの地区で広がりをみせる

ふれあいサロン活動

11月13日、第1回8町内会合同サロン活動交流会がジョイびじゅぐらで開かれ、約100名の方々が地域を越えて交流しました。ふれあいサロン活動は、赤い羽根共同募金からの助成を受け、身近な地域の町内会施設などを拠点として、高齢者等の生きがいや社会的に、気軽に集まれる「場」を作ろうと近年各地区に拡大している活動です。

町内では、平成25年に中央区町内会で初めて開催されたことを皮切りに広がりを見せ、現在では8町内会で実施されています。今回の交流会のメインは、その8地区の歌自慢達33名によるカラオケ大会、それぞれの地区代表た



ちが美声を披露しあい、観客から多くの声援や拍手が送られていました。

こうした合同イベントが行われるまで活発化しているふれあいサロン活動ですが、今年は上ノ国地区で町内史跡めぐりツアーや汐吹地区での男の手料理教室、その他の地区でも昔の写真回顧展や町外視察、ブルーン狩り、議会傍聴など内容に富んだ企画が次々と打ち出されています。

地域のふれあいが促され、絆が深まるサロン活動が活発化し、今後も輪が広がっていくことが期待されます。

また、ふれあいサロン活動を支援する上ノ国町社会福祉協議会（事務局長・松谷）では、同サロンの活動も今後実施したい町内会からの相談も随時受け付けているとのことですので、お気軽にご相談ください。

東京都大田区と檜山の

連携イベント

11月3日、4日の2日間、東京都大田区で開催された「OTAふれあいフェスタ」に檜山管内の7町が参加しました。

この取り組みは「北海道ひやま」のPRを目的に平成28年から、檜山管内7町連携事業の一環で始まったもので、今年は乙部のホタテ、厚沢部のとうもろこし、奥尻のワイン、今金のいもち、せたなのフランクフルトといった6品を販売し、全ての商品が完売となった。過去最高の販売額を記録したほか、郷土芸能の江差追分を披露し、地域の魅力をアピールしました。

訪れた人によりピルターも多くみられ、「昨年も買ったけど、おいしかったよ」「昨年の場所じやなかったから探しました」などの声が掛けられ、ゆっくりではありましたが確実に『北海道のひやま』が浸透してきている様子でした。



養殖確立で、安定収益目指す

今年、地元漁業者で組織された海洋牧場養殖部会（代表・小田昭彦）が本格的に活動を開始し、11月17日にアワビの種苗放流を行いました。

この部会は、漁獲量の激変に対応し、今後も安定的な漁業収益の確保を目的に、小砂子や大崎などの漁業者が中心となつて立ち上げたものです。

近年、本町を含む渡島檜山全域では、海水温の変化などでこれまで主流であったイカやヒラメ、ホッケ、タラなどの漁獲が低迷し、数年前から回復しない状況が続いていました。

安定収益確保のため立ち上がった本部会では、今回約3万個のアワビを養殖檻に放流し、今後数年の予定で放流や檻の増設などが計画されており、養殖が軌道に乗る、本町漁業の新たな収益の柱となることが期待されます。

